

巻頭言

巻頭言の執筆を承りました名古屋大学の金田です。私自身、惑星科学会に所属しておらず、専門は赤外線天文学(銀河や星間物質)のため、編集長から依頼を受けたときは躊躇しましたが、学会員でなくても巻頭言を書けるという貴学会の懐の深さに感銘を受け、お引き受けしました。

私はもともと太陽活動に興味があり、「ようこう」から研究が始まりました。その後、「あすか」による銀河面X線リッジ放射で学位をとり、「あかり」で赤外線に移籍しました。これまで25年以上、JAXA宇宙科学研究所(ISAS)のプロジェクトに深く関わっています。現在は長年の夢であるSPICA実現を目指し、プロジェクト推進と大学での研究教育との二足の草鞋を履いています。若いころから過酷なISASの衛星プロジェクトで鍛えられたおかげで、今の自分があると思います。その恩返しという意味で、今はいろんな形で惑星探査ミッションにも関わらせて頂いています。編集長とお知り合いになったのも、Destiny+を通してでした。

科学面では、名大は「あかり」中間赤外線全天画像の作成を担当したのですが、私にとって最初は邪魔ものであった前景の太陽系ダスト放射の存在が、色々と調べていくうちに銀河ダスト・星間ダストとの関連性に強く興味を持つようになり、私が指導した学生の一人は惑星間ダストで学位を取りました。近年は、千葉工大の木村宏さんが主宰するダスト国際会議のコアメンバーとして開催に協力し、知見・交流を広げています。また、SPICAは超高感度な赤外分光により、SPICA科学3本柱の一つである惑星系形成の研究(円盤ガス散逸・雪線・ダスト進化)のみならず、太陽系内・系外の惑星大気分光の研究においても大きな貢献ができます。

惑星科学はさまざまなミッションが立ち上がって、世の中の人気もあって勢いを感じます。私は宇宙科学に携わる一員として、現状を心強く感じると同時に、うらやましくもあります。ただ、衛星搭載の装置技術という点では、天文ミッションで築いてきた実績はまだまだ誇れるものがあり、色々とお力になれると思います。今後も天文学と惑星科学が共存共栄の形で支え合えるよう、自分はその一助となれればと思います。

金田 英宏 (名古屋大学)